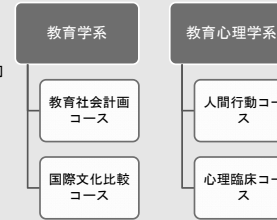


コアセミナー(教育学部基礎セミナー)の 取組評価と改善方策の検討

全学教育改善・実施経費に基づく共同研究



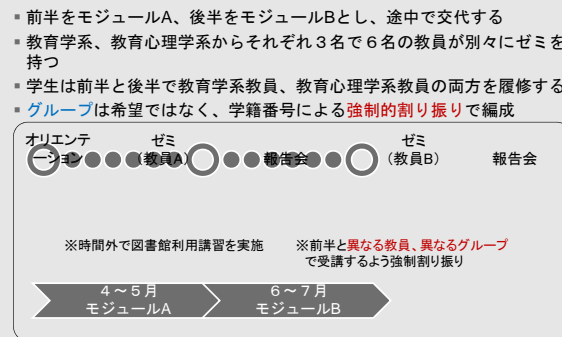
- 定員49名
- 教員30名 教授18、准教授9、講師1、助教2
- 2つの系と4つのコースで構成(下図)
- 公務員志望者から臨床心理士志望者まで幅広い学生が在籍
 - 教員志望者はわずか
 - 各学年 1~2名
 - 進学率、就職率とも41.5%
 - 教育学系の進学率は減少傾向



コアセミナーの趣旨

- 多様化する学生の学力に対応するため、九州大学で全学的に必修化された導入ゼミ科目。
 - ①大学における学習への適応を促進し学習意欲を向上させること
 - ②「読む、書く、調べる、発表する、討論する」等の学問を進めていく上で基礎的な能力を育成すること
- 教育学部では「**大学になじみ、将来も考えながら、教育学や教育心理学それらに関連する学問を学ぶための基本**」を習得する科目として実施
 - (1)問題に気づくこと、
 - (2)自ら考え、発想すること、
 - (3)自分の考えをまとめ、発表すること、
 - (4)異なる考えや意見に耳を傾けること、
 - (5)自分の知的活動を振り返ること

コアセミナー履修の流れ



コアセミナーの詳細

実践上の創意工夫点(1)

10名以下のゼミ形式で教員と関わる

- 講義形式、オムニバス授業ではなく、一人の教員が10名弱の学生を支援する体制を取ることで、深くきめ細かな指導が可能となる。

前半と後半の入れ替え制

- グループ指定制を取ることで、希望が偏ることによる不公平感を防ぐ。
- 教育学系と教育心理学系の教員からそれぞれ授業を受けることができる。
- 教員にとっても、前半と後半で15名を超える学生と接点を持つことができる。

コアセミナーの詳細

実践上の創意工夫点(2)

モジュールごとのステップアップを意識した内容構成

- モジュールAでは、教育学部に来た動機を振り返る活動などから、自分の問題意識に気づかせ、簡単な研究計画を作る活動を行う
- モジュールBでは、それを社会的諸問題と関連付けたり、他の人と共有できる課題にして「大学(教育学部)で何を学ぶか」という明確な課題を立てる活動を行う。
- 現実には同一内容を繰り返す教員が存在している

報告会の実施

- グループ内での協力や、成果のアウトプットの機会として、各モジュールの最後を報告会にあてている。
- 教員相互で実施内容を共有化する唯一の機会でもある。

これまでの取り組み

研究の構成要素

受講経験者による座談会

- 第1期生(2006年度入学生、現M2)から、第6期生(2011年度入学生、現在の1年生)までを6名集め、学年ごとに座談会を実施(計36名の協力を得た)。
- 教育学部のカリキュラム、あるいは正課外活動の中で、コアセミナーでの体験がどう生きたかを収集している。

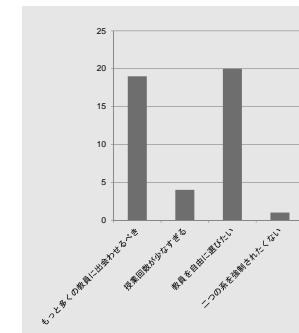
受講者アンケートの実施

- 2009年に受講者アンケートを実施。科目運営上の問題点などを洗い出した。

他大学事例の調査

- Q-Links賛同者などの協力を得て、他大学の初年次教育に対する取り組みを調査する。

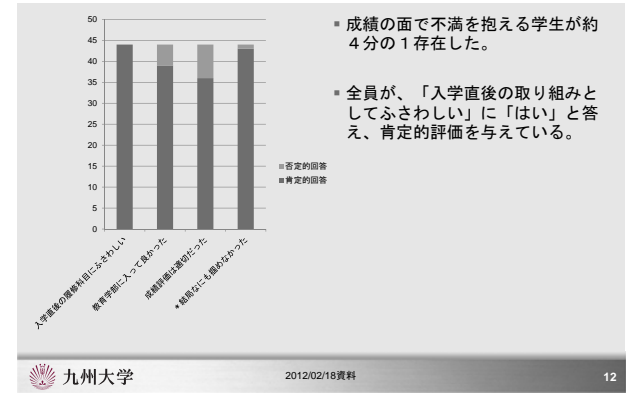
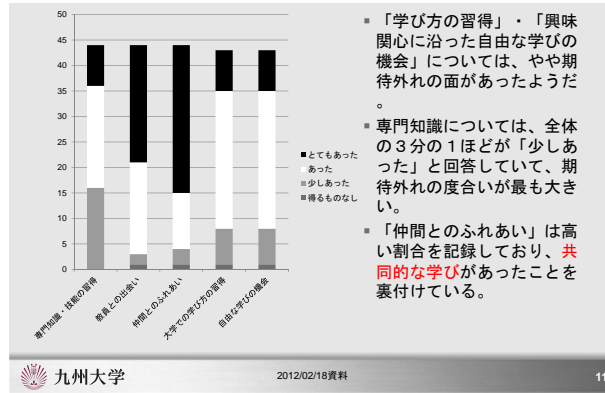
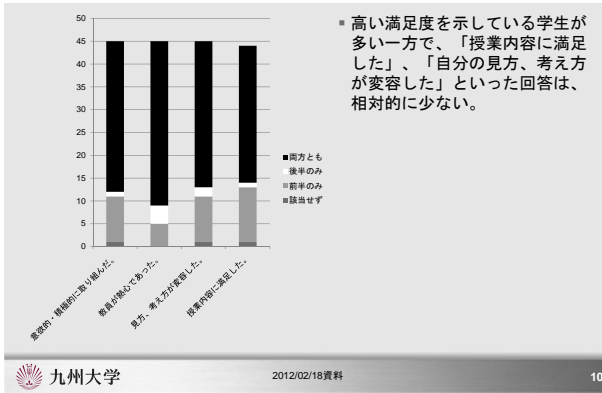
過去のコアセミナー調査(元兼研究室、2010)



- 2009年度受講生(46名回答)

- 授業感想として多かったもの
 - 「教員一人当たりの時間や回数を減らして、もっと多くの教員に出席させるべきだ」
 - 「グループの学生人数に偏りが出ても、教員を自由に選べるようにしてほしい」

- 両方の系の授業を取る形態には肯定的評価
 - 「前半・後半で教育系と心理学系双方を履修しなくてもよいようにすべきだ」(わずか1名)



コアセミナーの課題（1）

■ 実施理念の共有不足

- コアセミナーの趣旨の未徹底が、内容のばらつきや活動への不理解を生んでいる。
- 教員の当たり外れや、重点ポイントのずれた教育活動の原因となっている。
- 座談会参加者アンケートから
 - 「自分のときは、（中略）とても役に立つ授業であったが、担当の先生によってする内容がかなり違ってくるため、何とも言えない」
 - 「先生に**当たり外れがある**と思う」

コアセミナーの課題（2）

■ 未開発な組織と教授スキル

- 前半と後半の接続が図られにくい。
- ゼミ形式の授業を得意としない教員が存在し、受講学生が戸惑う場面がある。また、グループ内での発表準備分担の偏りを放置したり、発表へ向けた手立を講じない教員も存在する。
- 教員間のコミュニケーションがほぼなく、各グループの内容が**たこつぼ化**している
- 座談会での発言から
 - 「発表会の質が低かった」
 - 出典の不明確な情報を発表したり、本の内容まとめになっていたりした
 - 「**なんかホントにこんなんでもいいんだ、レポート**」
 - 他の資料の引き写しのようなものを提出しても特に何も言われなかった
 - 「先生も何をやっていいか迷っておられた」
 - 資料なしで90分間を過ごした

コアセミナーの課題（3）

■ 共通内容と教員の創意工夫のバランス

- 以下のような要素が思い思いに盛り込まれ、各グループの内容がバラバラ
 - 学部のガイダンスの内容
 - 教育学・教育心理学の基礎的知識
 - 文献の検索方法
 - レポートの書き方
 - ディスカッションの方法
 - 教員の興味関心に基づく専門的内容

■ 不明確な評価の観点

- 評価の観点が不明確なため、成績評価の不満が出やすい（約4分の1）。
- 良い成績を付けたからといって納得するわけでもないようである。

低年次カリキュラムの問題

■ 教育学部に入学したのに、教育学部教員の授業が少ない

- 入学当初のモチベーションの高い時期に、専門的内容がわずかしか提供されないことは、学生の「**がっかり感**」を生んだり、自身の適性の見極めや専門教育の科目選択についての情報不足を招いている。
- 座談会発言から
 - 「**学びたいときに学べない**。ちょっと偉そうなんですけど。でも**履修の余地がない**っていうのは。時間もあつたのに、箱崎にわざわざ来るのに、ひとコマで帰る...。」
 - ※全学教育段階の学生は、福岡市郊外の伊都キャンパスで過ごす

■ 学部教育の目標や、学位プログラム上の到達目標が不明確

- 低年次に何を、どこまで、どのように教えるか不透明

課題への対応

■ コアセミナーの趣旨をまとめたパンフレットを作成

- 学部長裁量経費により、コアセミナーの趣旨を解説するパンフレットを作成する。パンフレットには、実施上の工夫4点を盛り込む予定。
- 本取組評価の報告書を作成し、学部教授会後のFD懇談会で報告する予定。

■ 次年度担当者による取組評価活動

- 本プロジェクトには、次年度担当者の代表も加わっている。

■ 座談会によるニーズ把握

- 現在籍者にディスカッションとレポート作成に対する要望が多いことが明らかとなってきた。

■ カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーとの連動

- 学部教育の目標や到達目標を踏まえて本科目を位置づける。このために、教員間での協議の機会を設ける

プロジェクトWebサイト

■ アドレス

- <http://www.education.kyushu-u.ac.jp/~motokane/index.php?id=199>

